
スティングー

淡雪ぼたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ステインガー

【Nコード】

N9107T

【作者名】

淡雪ぼたん

【あらすじ】

『カクテル・バー』シリーズ第2弾”ステインガー（カクテルの名前からイメージを膨らませて書いた小説です） / 見合い結婚した夫は、とても冷たい人だった…。離婚を決意し家を出る沙那^な。3年後、ホームクリーニングの仕事先で向った高級マンションの住人は元夫だった。ウィッグをかぶり、カラーコンタクトをしてハーフ女性に変装して名前を変えて働き始めるが、元夫は変装した自分^なにぞっこんの様子…。《携帯創作小説サイト フォレストにて発表の作品です。》

第1話 籠の小鳥

今宵のカクテルのお話しは『ステインガー』

ステインガーとは、針や毒牙、あるいは毒舌家などのことを意味する言葉。

甘さの中にピリツとした刺激のあるお酒です・・・。

レシピは・・・。

・ブランデー2/3

・クレム・ド・ミント（ホワイト）1/3

これをシェークしてカクテルグラスにどうぞ・・・。

* * * * *

高校を卒業したばかりでこの家に嫁いで来た、沙那^{さな}。

まだ18歳と言う、是から益々瑞々しく花開き青春を謳歌するはずの年代なのに、その表情は輝きを失い、長いまつ毛の澄んだ大きな瞳はどんよりとした灰色の雨雲のように曇っていた。

そして、キューピットの口の様に愛らしく若干幼さの残る唇から吐息がひとつこぼれた。

ぼんやりと窓の外に揺れるアカシアの木を見ながら、あれこれ思いに耽っていた。

『この家の人間は皆よそよそしくて、なんだか冷たい気がするわ・・・。』

執事も無表情で坦々としてるし、女中達も冷ややかな目で私を見てる気がするし、態度も妙によそよそしかったり・・・』

焦っていた様子だった。

沙那の結婚が決まって間もなく、安心して気が抜けてしまったのか？体調が急変し、最後は詫びながら、天国へと旅立って行った。

政略結婚だったが、沙那はただ父親の言われるままに結婚を決めたわけではなかった。

初めて見合いの席で右京に会った時、一目見て心が時めいた。

背がスラツと高く、流れるようなサラサラの少し茶色がかった髪。

髪形は、少し長めの前髪を、3：7 辺りで少し分けた、大人ナチュラルショートヘア。

高級スーツをさりげなく着こなし、モデル並の整った美しい顔立ち

澄んだ目は隙がなさそうな、ちょっと挑発的な感じで、理知的に光

なんて凛々しくて素敵な人なんだろう……。

自分の回りにはいなかった頼りがいのありそうな、そして回りの女性

性が皆ふり返って見るぐらい素敵な大人の男性……。「ふと漠然とだけれどそう思った。

そして何よりも、見る見るやつれて衰えていく父に、心配をかけないように、自分の事で負担に思わないようにと、思っこの結婚を決意した。

父親が懸命に働いて一代で興した会社、和泉繊維も守りたかった……。

見合いの席でちょっと気になることがあった。

右京は結婚相手である沙那に、あまり興味がない感じで、父親とばかり話しが弾んでいた。

沙那の事は、眼中にありませんと言う雰囲気、殆ど目を合わせる

こともなかった．．．。

沙那が18歳と言う若さだからなのか？

入籍して鎌倉の橋の屋敷に初めてやって来た日から、ずっと今まで夫婦の契りを交わした事がない。

部屋も別寝室で、殆ど顔を合わせないし殆ど会話もない．．．。

この家に初めてやって来た時には、夜の事を思うと不安になり、物凄く緊張していたが、その不安と心配もすぐに消え去った。

．．．．夫は全く自分には関心が無いんだ．．．。紙一枚だけの形だけの夫婦なんだ．．．。

沙那があれこれ物思いに老けてぼんやりしていたら、メイドのドアをノックする音でハッと我に返った。

「はい。どうぞ」

「失礼します。奥様、夕食の準備がととのいました」

「部屋で食事しますので．．．」

重厚感溢れるインテリアと広々したダイニングルームは、一人で食事をするのはとても重く、ここ最近では自室で食事を摂っていた。

「ですが．．．今日は旦那様も早くお帰りで、一緒に食事を摂るよつと奥様にお伝えするよつとこの事でございます」

今日は珍しい人が家にいるんだ．．．。

「わかりました．．．」

内息が詰まるようで、気が重かった。

ダイニングルームに行つて、心臓が止まりそうになった。

―――なんて、小倉深雪おくら みゆきが？！

小倉深雪は、前に一度会つた事があつた。

他の社の社長秘書を務めている仕事関係の人らしく、最近右京さんの回りをうるついている、私からみたらハイエナの様な人だ．．．。父の体力が思わしくなく、やむなく私が代理で父の仕事の重要書類を届けに、右京さんの社に出向いた時に紹介された人だ．．．。他社の人間がなんで社長室や右京さんの回りをうるついているのか？謎だつたが．．．きっと愛人なんだと思う．．．。

「やあ、可愛い奥さん！ 久しぶりだね」

久しぶりに見る夫．．．。最後に会つたのは何時だつたかしら？とふと思つた。

「御無沙汰しております」

夫婦でこの会話も可笑しな物だわ．．．。

「今日は久しぶりに早く家に帰れたから、愛妻と一緒に食事でもと思つてね」

「その割には．．．もうお一人いらつしやるようですね」

沙那が深雪をチラッと見てから右京を睨みつけ、思いつく、精一杯の憎まれ口を言つた。

「大事な客人だ．．．妻として粗相の無いように．．．」
右京はちよつと怒つた様に、冷ややかな目で沙那を見た。

「奥様、おじやましております」

深雪が勝利した様な得意顔で、沙那を見下げるように、鼻のつくような意地悪そうな笑を浮かべた。

「どうも．．．」

沙那は早くこの場を立ち去りたい．．．この嫌な時間が早く終わってくれればいいと思った。

食事中、深雪と右京でお喋りに花が咲き、沙那はまるつきり蚊帳の外だった．．．。

まるで沙那が透明人間でもあるかのように、完全に存在を消されたようだった。世界一不味い食事を食べている気分だった．．．。食事が喉を通らない．．．。

『右京さんにいつもまとわりついているこの女．．．。何者なの？やはり愛人なのですか？』

食事の進まない沙那にやっと気がついたように、右京が初めて沙那に話しかけた。

「おや．．．あまり食べてないようだけれど、具合でも悪いのか？」

「だ．．．大丈夫です。どうぞ、話しを続けて下さい」

「沙那さんはちょっとダイエットのしすぎじゃありませんの？もうちょっと栄養を摂って、女性らしく豊かな体つきになった方が、右京さん好みだと思いますわよ」

「．．．．．」

とても気分の悪くなる言葉だった．．．。

私．．．この人大嫌い！！

沙那の気持ちなどまるつきり気にならないような感じで、また2人で楽しげに話し始め、沙那はこの時の事が決定的な出来事の様にある感情が沸き起こった。

『右京さんなんて！大嫌い！！ この家を出たい・・・』

（第2話に続く）

第2話 籠から飛び立った小鳥

あの苦痛のディナータイムから開放されて、自室に戻ると沙那は崩れるようにベッドにうつ伏せに倒れ込んだ。

『右京さんもなんで私を食事に呼んだのよ!! 愛人と2人仲良く食事してればいいじゃない!!』
腸が煮えくり返るようだった。

* * * * *

あれから小倉深雪は頻繁に右京と鎌倉の屋敷にやって来るようになった。

小倉深雪はこの屋敷の、まるで女主人のように振る舞うようになって来た。

右京もそんな深雪を嗜めるでも無く、執事や女中達も、彼女の指示に従うようになってきた。

-. -. -. 沙那はただの客人のような気持ちがあった。。。

それから間もなく沙那は決定的な2人の姿を目撃してしまった。

昼下がりの午後。。。

たまたま右京の書斎の部屋の前を通り過ぎようとしていた時に、2人の楽しそうな声と深雪の甲高い笑い声が聞えて来て、扉が少し開いていて、その隙間から衝撃的な2人の姿が見えてしまった。

書斎の椅子に座る右京の膝の上に深雪が腰掛け、熱い口づけを躲していた。。。

更に、心が真っ二つに引き裂かれるような言葉を聞いてしまった。

「ねえ、かわいい奥さんとはどうなの？」

「あんな乳臭い、親の言いなりの、何も考えてないようなお人形は全然興味ないな」

「あら．．．。たまには優しくしてあげないと、可愛そうなんじゃない？一応奥さんなんだし．．．。」

衝撃的な会話だった．．．。

「もうこの家を出よう．．．。」沙那は決心した。

小倉深雪が帰ってから、沙那は右京の居る書斎のドアをノックした。

「どうぞ」

冷たい返事が返って来た。

「あ．．．。」

「どうした？」

「私と別れて下さい」

手をギュツと握りしめて、真直ぐな目で右京を見た。

沙那が別れを切り出したら、意外にも右京は怯んだような、驚いた顔を一瞬した。

いつも冷静な人なのに．．．。感情を表に出す姿を初めて見た気がする。

「まだ新婚なのに、もう別れるっていいのか？」

右京は少し怒っている様で、気分を害されたような、非常に不愉快に感じてるようにも見えた。

「右京さんの狙いは、父の会社と、特殊繊維の特許権ですよね？ 差し上げますし、私は何も要りませんから、ただ別れて下さるだけでけっこうですから」

「俺に恵んでやるって？」

「それが望みで結婚されたのでしょうか？」

「お前は何で結婚したんだ？」

「父の会社を守りたい．．．そして病気の父を安心させたあげたいと思いましたが、初めてあなたにお会いした時は、素敵な人だと心魅かれて結婚を決めました。でもあなたの本当の姿を知って．．．嫌いになりました」

「随分心変わりが早いもんだな」

「私は、結婚して妻がいる身で他の女性と浮気したりする、不誠実な人や、自分の利益の為には手段を選ばない、計算高い利己的な人は大嫌いです」

右京の目を真直ぐ見て、沙那は大声ではっきりと言った。

右京は、ただの人形だと思っていた沙那が、意志を持った女性だと初めて気がついたような驚いた顔をしていた。そして何も言わなかった．．．。

「離婚届は後で送りますから。じゃあ」

沙那はくるつと背を向けて書斎を出ていこうとした。

背中越しに、捨てぜりふのように言った、右京の言葉が刺さった。

「何もした事もない、何も出来ない、お嬢様育ちのお前が、どうやって1人で生きていくんだ!!!」

確かにその通りだと思った・・・。

でも、死ぬ気になればきつと私だって自分の力で生きていける・・・。

ただのお飾りだった人形が、意志を持って、これから自分の足で歩き始めるんだ。

いや、絶対に歩くんだって心に誓った。

部屋に戻って、必要最小限の荷物だけまとめて鎌倉の家を出た。

心細くて、孤独で、淋しくて、とても怖い・・・。

でも、もう私は自由だ!!! これから自分の力で歩くんだ!!!

(第3話に続く)

第3話 小鳥はもう籠には戻らない

鎌倉の屋敷を飛び出して数日後、沙那は離婚届を封筒に入れ、右京に送った。

結婚指輪や婚約指輪は、鎌倉の屋敷を出る時に全て置いてきたので、紙1枚以外送る物はない。

右京に送る最初で最後の手紙だなとふと思った。

大船駅すぐ近くで、保証人の要らない家賃3万の6畳一間の安アパートを見つけ、そこに住み始めた。

築30年と古いが、キッチンとユニットバスもついて居て、南向きで日当たりもいい。

沙那が今まで使ってた来たウォークインクローゼットよりも狭い部屋だが、天露しのげて生活出来たら幸せだと思った。

あの冷やかな鎌倉の屋敷よりも全然良い。。。

結婚以前から持っていた貯金通帳には、まあまあ額のお金が残っていたが、不測の事態に備えて出来るだけ使わない様に心がけた。

今までの自分は切り捨てて、まずは質素な金銭感覚を身につけ、それに慣れるようにしないとと思い、初めは近所の商店街など見て回って物の最低値を覚え、食品はおつとめ品を買うように決めた。

ガス・電気・水道。。。当り前の事だけど、なんでもお金がかかり、そのお金を働いて得る事はとても大変な事なのだと、恥ずかしながら初めて知った。

時には惨めな気持ちにもなったが、そんな時にはあの右京の顔を思い出し、「決して負けないから！！」と自分を戒めた。

仕事も見つけた。デリバリーのお弁当屋の仕事だ。

包丁ひとつ握った事が無かったので、失敗ばかり。。。毎日先輩のパートのおばさん達に怒られてばかり。。。

『自分はなんて今まで甘やかされて育ったんだろう．．．簡単な事ひとつまともに来ないなんて．．．』
落ち込む事ばかりだった．．．。

家で一生懸命基礎から料理本で勉強して、包丁練習や料理練習をした。

。 気持ちが負けそうになる時いつも右京の顔と声が浮かんできた．．．

『何もした事もない、出来ない、お嬢様育ちのお前が、どうやって一人で生きていくんだ．．．』

「私．．．絶対に負けないから!!」

* * * * *

必死で頑張つて半年が過ぎた辺りから．．．だんだん自分に自信がついて来た。

『私．．．自分の力で生きれるじゃない!!』

失敗だらけだった弁当屋の仕事で、初めに自分の才能に気がついたのは盛り付け．．．。

測りを使わなくても大丈夫なぐらい、感覚で同じ分量を器用に盛り付けられて、その早さと正確さに従業員みんなが驚き一目置くようになった。

包丁使いや料理の方も毎日努力した甲斐があつて、他の従業員と見劣りしないぐらいのレベルに達した。

最近に従業員皆、優しく接してくれる．．．。

「沙那ちゃん、配達お願いできるかな？」

配達伝票と悪戦苦闘中の店長が、首を伸ばして沙那に声をかけた。

「はい、大丈夫です」
あれから車の免許も取得した。

「ご新規さんの配達なんだけれど．．．『株式会社マルキヨウ』さんね。場所はここ．．．」

店長から地図の書かれた紙を受け取った。

「じゃ．．．いつてきます」

車に初心者マークを付けて、慎重に安全確認して車を発進させた。

車で15分程走った所にある2階建てのコンクリート造りの会社の外階段をトントン．．．と駆け上がって、配達先の事務所の玄関インターホンを押した。

「まいどありがとうございます。”仕出し弁当の花菱や”です。お弁当20個お届けにあがりました」

「はい」

若い女性事務員がにこやかに扉を開けて出てきた。

「まいどありがとうございます。幕の内弁当20個お届けにあがりました」

沙那が弁当と伝票を手渡して、帰ろうと思った時だった．．．。

「あの．．．社長がお弁当の事で色々お聞きしたい事があるそうので、中に入って伺って頂いても宜しいでしょうか？」

「あ．．．はい。でも私．．．タダの従業員ですので、詳しい事は店長さんか営業の方に話しをされた方が宜しいと思うのですが。」

「あ．．．いえ．．．。ちよつとした事らしいので．．．」

「分かりました。それじゃあ失礼致します」

なんか変だなと思いつながら沙那は事務所に通され、奥の社長室まで案内された。

女性事務員について行って、社長室に一步入って驚愕した．．．。

「右京さん!!」

冷やかな笑を浮かべた右京が社長デスクに座っていた。

それから右京が女性事務員に下がるように手で合図し、沙那と2人つきりになった。

「どういうことですか!!」

「随分やつれたな．．．」

繁々と沙那を見てから、重い表情でポツリとつぶやいた．．．。

「私の妻なのに、この会社が橋グループの子会社だと言う事も気がつかなかったのか?」

「え．．．?」

「社名のマルキョウは私の名前、右京の『京』の文字をとったのだよ．．．」

勝ち誇ったような見下されてるような感じに見えた。

「あ．．．」

しまった!!と思った。

右京がデスクから立ち上がって、沙那に近付いてきた。

「手も大分荒れてるじゃないか．．．」

いきなり手を掴まれて、ゾクツと寒気がした。

ぱつと掴まれた手を払った。

「何ですか？離婚届はもう送りましたし、私．．．もうあなたの妻ではありませんから．．．この会社の子会社だろうがなんだろうが私には関係ありません！！用事が無いのなら私、帰ります」

「戻って来いよ．．．」

右京の意外な言葉に酷く驚いた。

「何言ってるんですか．．．早くあなたに送った離婚届を役所に出して下さい！！そして深雪さんと、どうぞお幸せに．．．」

「深雪とはなにもない．．．」

苦しそうな表情で、一瞬目を背けてポツリと言った。

あんな場面を人に見せつけておいて、何も無かったで済ませられると思ってるの！！

相当私は馬鹿にされてるわ！！と怒りで頭が破裂して頭のとっぺんから溶岩が流れてくるのじゃないかと思った。

「今更そんな事を言っても、私が信じると思いますか？とにかく戻る気は一切ありませんし、あなたとは1分1秒でも早く別れたいので、離婚の方よろしくお願いします。」

それから、『何もした事もない、出来ない、お嬢様育ちの私が、一人で十分生きていけてますから．．．』あなたがいなくても大丈夫ですの！！それじゃあ失礼します」

クルリと背を向けて出ていこうとした時だった、右京にグイと手を掴まれて引き寄せられた。

「いくな．．．」

彼がそんな言葉を言うなんて信じられなかった．．。

思いもかけない事に一瞬怯んで、固まってしまった。

気がつけば、右京の腕の中に抱きしめられてる自分がいた。

『ハッ!』と我に返り、慌てて体を引き離し、思いっきり右京の拗ねを蹴飛ばした。

「さようなら!」

大股で足早に事務所を出ていった．．。

その日のうちに退職願いを出し、沙那は惜しまれながら弁当屋を辞めた。

(第4話に続く)

第4話 目黒メグ誕生！

鎌倉の屋敷を飛び出してから3年が過ぎた。あの時18歳だった沙那も21歳の大人の女性になった。

家を飛び出した頃は、まだどことなく幼さが残っていて、世間知らずの頼り無げな線の細い雰囲気があったが、3年間苦勞し鍛えられて、すっかりした凛とした女性へと変化していった。

お弁当屋の仕事は、初めて働くと言うとてつもない大変さと、馴れない仕事に先輩から怒られ、無能な自分に腹を立てて泣いたしよっぱさと、労働してお金を得る事のなんとも言えない楽しみ、そしてそのお金で自分だけの力で生きる喜び、様々な事を学んで本当に職場を去る事が辛かった。。。

だけど、右京の手の中から逃げ出したかった。。。

鎌倉の屋敷に居る時には手でさえ触れられた事が無かったと思う。。。

あの再会した時に、彼から腕を引き寄せられ抱きしめられた事が、初めて肌を触れ合わせた瞬間だったと思う。

その一瞬、心地良く思ってしまった自分が嫌だった。。。

自分が受けてきた屈辱を一瞬忘れてしまった。。そんな自分が許せなかった。

ほんの一瞬でも気持ちが悪くならつくなんて！！なんて愚かな事だろう。。。

きつと男の人にあんな事をされたことが無く、初めての事だったから動揺しただけだ。。きつとそうだ。

もう二度とないと思うけれど、今度もし会う事があっても、絶対。。

絶対にはやまない。

あの人は私の敵だ！！愛人が居ながらよりを戻したいだなんて、なんて自分勝手な人なのか。。。

それに大嘘つきだ．．．私が何も知らないと思って、平気で嘘を言つてのける。

2人の濃厚なキスシーン．．．あの光景は絶対に忘れない！！

沙那はあれから、東京目黒にあるハウスクリーニングの会社に努め
だした。

給料はまあなんとか食べていけるぐらい．．．。

それでも充実している。

気になる事がひとつ．．．。

あれからまだ右京は役所に離婚届けを出してない。

時々戸籍を確認しに行ってるが、まだ橘沙那 のままだ．．．。
嫌がらせなのか？ 何か企みがあるのか？ 利害関係か？

どうにかしなくてはと思いながら、彼に会いたくないし関わりたく
無くなくて、そのままにしている．．．。

いつか裁判にかけて離婚を勝ち取って見せるわ！！

．．．ある日の事だった。

ハウスクリーニングの所長から仕事を頼まれたが．．．。

少し嫌な予感がした。

高級マンションの広い家のハウスクリーニングの依頼．．．。

依頼主の家主は『橘右京』 きつと同姓同名だろうと思った。

元夫の屋敷は鎌倉にあり、いつも出社している本社は横浜にある。
東京のこの地には縁がないはずだ。

でも、前回のようなニアミスが起きらないとも限らない．．．。

所長さんに違うお宅に回して欲しいと頼んだ……。理由を聞かれて戸惑ったが、正直に依頼主の名前が別れた夫と全く同じで、もしかしたら元夫の家かも知れないからと話した。所長はこの若さでバツイチ？と、大変驚いた。

暫く考え込んでいたが、人手不足で更にお金持ちの家なので、真面目で信頼出来る人じゃないと困るし、適任なのは君しかないかと頼み込まれた……。

所長には色々良くして貰ったし、あまり我が儘を言っではと、考えるに考えて相手が元夫かどうか確認する為に、初日だけ変装して名前を変えても良いならと言う条件を出した。

本当はそんな事は許されない事だが……所長も渋々聞き入れてくれた。

そして沙那は、明るい栗色のセミロングのミリタリーウェーブのウィッグをかぶって、バイオレットのカラーコンタクトをはめて、変装してみた。

元々色白で、彫りも深い顔立ちなので、そう言う姿をすると違和感なくハーフっぽく見えて、まるで別人のようだ……。

沙那はハウスクリーニングの事務所に寄って、所長の反応を確かめてみた。

所長が沙那を見て言った第一声が……。

「き・きゃんゆう・すびいく……じ・じゃばにいいず？」

慌てふためく所長の姿がすごく可笑しかった。

「所長さんったら……私です。橘沙那です」

「ええーっ．．．えええーっ!!」
椅子から崩れ落ちそうに卒倒する所長。

「ハーフっぽく見えますか？」

「み．．．見えるけど．．．その格好．．．」
口から泡が出そうなカニみたいに口をパクつかせて驚いていた。

「相手が夫ではない事を確認出来るまでは、目黒メグで宜しくお願
いします」

名前の由来は、事務所が目黒にあったから．．．。メグも目黒から
とった。

「全く．．．しょうがないねー」
渋々許可する所長。

「では、いつてきます」

「変装がばれないように、十分気をつけてよ！」
所長はばれたら営業停止の危険もある．．．冷や冷や物で落ち着き
がない。

「はい」

* * * * *

そして依頼先の、赤坂の高級マンションに向った。
豪華な装飾の高級感漂うエントランスを入り、フロントに向った。

「こんにちは！ 美・ハウスクリーニングの者ですが、2015号室の橘さんにご依頼を承りまして、伺いました」

そう言つて沙那は、フロントの人に目黒メグの時だけの身分証を提示した。

「はい、伺つております。 あちらの専用エレベーターで20階に上がってください」

「はい。わかりました」

20階について2015号室に行き、インターホンを押した。

「はい」

インターホン越しに聞えた返事の声が、何となく聞き覚えのあるような声だ．．．。

神経質になっているからそう聞えるだけだろう．．．たぶん気のせいだ。

インターホンに顔を近づけて、あいさつをする。

「まいどありがとうございます。美・ハウスクリーニングの者ですが．．．」

暫くして、玄関扉がガチャリと開いた。

「どうも、入つて」

顔を見て、ムンクの叫び状態になった．．．。

一瞬心臓が止まった．．．心電図をつけていたら、波形が絶対に0をさしていたらう。

やっぱり右京だった．．．。

(第5話に続く)

第5話 オフェンス? デイフェンス?

まさかとは思ったが、目の前に立っているのは紛れもなく右京。

「また?!」

まさかこの3年間ずっと追いかけられ続けてきたのか?

啞然呆然として頭の中が真っ白になって、思考回路が停止寸前状態
..。

これは...偶然なのか? 故意なのか?

本人に問い詰めたい気もするけど、もし自分の素性がバレてなくて
ただの悪縁で意にそぐわない再会となったのなら、このまま惚けて
何事も無かったようにサツサと仕事を済まして、次回からは他の人
と代わってもらって、もう二度と関わらない様にすればいいんだか
ら...。

「そうよ!! 敵の居場所を知っていた方が、身動きがとれると言っ
か...。もし私の事が沙那だと気付いていないのなら、好都合だ
わ... 敵の今の様子も探る事が出来るし... もし愛人と暮らし
ているのなら、それを理由に離婚を迫る事も出来る... 早く身辺
をスッキリとさせたいのよ... 早く橘の姓ともおさらばしたいわ
..」

「どうした? 何か顔についてるかな?」

無言でぼんやり立っている沙那に右京は不審顔...。

「あ... いいえ。まいどありがとうございます。お掃除に伺いま
した」

何事もなかった風を装って、ペコリと頭を下げた。

「どうも、入って...」

私だと言う事はばれてない感じだ・・・。
鎌倉の屋敷しか知らなかったから、右京さんがこんな所に住んでい
たとはと驚いたわ。

あの愛人深雪さんもここに来て、ランデブーしてるのかしら？

「おじやまします」

「君ハーフ？」

沙那をジツとみて、右京がポツリと言った。

「あ・・・はい」

やっぱりハーフっぽく見えるんだ。変装大成功！！

「どこ？」

「は？」

「国は何処？」

「母がアメリカです」

内心うそうそ・・・ってほくそ笑んだ。

自分の白々しい嘘につい可笑しくなって、すっかり吹いてしまう所
だった・・・。

にやけた顔で言ってしまったかしら？

「ふーん」

ジロジロと不審そうな目で見てくるので、ドツキりする。

『もしかして、バレた？』

慌てて気を反らそうと、話しかけた。

「あの．．．ご依頼の場所は何処でしょうか？」

「部屋全部．．．」

「ええーっ」

アツサリと突拍子もない事を言うので、つい大きな声を上げてしまった。

「そんな話しだとは聞いておりませんでしたので、スタッフを数人連れて来ればよかったですね。」

すみませんが私一人では、かなり広いお宅ですので、今日これからは全ては終らせられないかと．．．」

「時々しか使わない家だから、そんなに汚れてないと思うんだ。そんなに力入れなくても良いから。」

全体的にザツと掃除してくれればいいからさ．．．」

「それで宜しければ．．．。かしこまりました。あの．．．。入っ
てはいけない場所とか、注意する場所とかはございますか？」

「ない」

「は?!」

またまたあつさりした答えに、驚きを隠せない．．．。

「別に隠す所もないし、あんた盗んだりもしないでしょ?」

「それは勿論です!!」

盗みの言葉にカチンと来て、力を込めて言った。

「だから適当に．．．」

にやりと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「分かりました。じゃあ玄関から順番に掃除します」
内心適当と言われるのが一番困るなと思った・・・。

「よろしくね」

「はい」

玄関に行こうとした時に、呼び止められた。

「あ・・・ちょっと待って」

「はい？」

「これを・・・」
家のカードキーをポイと手渡されて、非常に戸惑い驚いた・・・。

「これは？ 何でしょうか？」
手渡されたカードキーを右京に見せ、凄く迷惑そうな顔をして見せた。

「明日から毎日来て」
そんな事には全く動じない雰囲気のある右京。

「えええーっ！！！！」

「あんた気に入ったから、明日からうち専門で・・・。フロントには言っておくから、今度からそのまま家まで来て。
俺がいなかったら、勝手に入って良いから」

「それは困ります。私．．．これでも忙しくて、予定が色々つまつておりますので．．．」

今日1日で敵とはおサラバするつもりなんだから．．．勘弁して欲しいわ．．．相変わらず強引な男だわ．．．。

「その事は大丈夫ですよ。所長にはさつき頼んでおいて了承をとつてるし。あんた、所長がいち押し of 真面目で丁寧に仕事する人らしいから．．．」

「えええーっ!!」

所長さんってば．．．。勝手に決めないでよーっ。

「と言う事で、明日から、毎日一日うち専門でよろしくね」

「は．．．はあ」

嘘でしょと思った。やっとこの人から離れられたのに．．．。でも．．．前の弁当屋のように、敵の為に仕事を辞めるのも嫌だった．．．。

この仕事気に入ってるし．．．。

「なに? なにか?」

ええーい!! 仕方ない!!

「わ．．．わかりました。よろしくお願いします」

こうなったら．．．敵の動向を探つて、ついでに復讐もしてやるわ!!

深雪さんが来たら、写メとつて証拠を押さえて、その時に沙那だつて正体をバラして離婚を迫つてやる!!

右京さん!! 明日から覚悟しなさいよーっ!! 首を洗つて待つてなさいっ!!

(第6話に続く)

第6話 復讐の機会

それから毎日、目黒メグに変装して、右京のマンションに渋谷掃除に通った。

土日を抜かして月から金まで、朝から夕方まで．．．。
綺麗だから、そんなに毎日掃除しなくても良いのに．．．。

初めはこの家の中に、深雪さんの気配とか、女性の気配のする物が絶対にあるだろうと確信に近いものがあつたが、そう言ったものが全く無くて驚いた．．．。ちよつと当てが外れてガツカリな気もした。

本当に男の一人暮らしで、ただ寝に帰って来て、やり残した仕事をここでやるような、そんな場所のようだった．．．。
愛人と過ごす場所は他にあるのだろうか？

どうやって仕返しをしようかあれこれ思案していたが、くだらないイタズラとかそういう事はイヤだったし、お世話になっている会社に迷惑がかかるのもイヤだったし、結局真面目に一生懸命掃除の毎日だった．．．。

* * * * *

今日はインターホンを鳴らしてもシン．．．として人の気配が無かったので、渡されたカードキーを使って家上がった。

この家に来て、書斎に立派なグランドピアノがあるのには驚いた。ハンディモップで丁寧に埃を落としながら、ポツリと嫌みをつぶやいてみた。

「ピアノなんて弾く顔してないのに．．．」

「ピアノが気になる？」
いないと思って呟いたら、いつの間にか後ろにいてドッキリして飛び上がった。

「あつ、いいえ」

今の独り言聞かれたかな？

「これはお袋の形見．．．。ピアノ教師してたんだ。

結構高価な物で良いピアノなんだけど．．．君には分からないか？
フンと小馬鹿にしたようなその含みのある笑い方にムツとした。

「そのぐらい分かりますよ」

「見栄張っちゃって．．．。弾けもしないでしょ？」
更に追い討ちをかけるその言葉．．．。

「そのぐらい弾けますよ！！」
益々ムキになってしまった。

「弾いてみてよ。ねこふんじゃったとか？」

この憎らしい右京を打ち負かしてやろうと思い、ものすごくそんな曲をバババーンと弾いてビビらせようと思った。

何がいいかな？焦って思いつかなくて、結局ショパンの革命にした。
今の私のモヤモヤした気持ちと攻撃的な気持ちにピッタリマッチするわ．．．。

思いきり気合いを入れて弾いて、終わってから右京を見たら物凄く驚いた顔をしていた。

目が点状態だ．．．。

ザマー見なさい！！って思った後に、ちよつとしまったと思った。

「君、普通の家庭の子じゃないね。良いとこのお嬢様じゃないの？」
不審そうなその顔に、『あーやつちゃった．．．』と思った。

「いえいえ．．．とんでもない！！ 独学で覚えました」
慌てて弁明する。

「ふーん」

かなり不審そうな顔をされて、心臓がドクドクした。
確かに、私、有名な先生に習ってました。

「ねえ．．．お願いがあるんだけど．．．」
暫く考え込んでるような顔をしてから、ポツリと言った。

「は．．．はい．．．なんでしょうか？」
何を言われるのかドギマギ状態．．．。

それから右京は本棚から古そうな楽譜を数冊持ってきた。

「これはね、お袋の形見なんだ．．．。お袋がこのピアノで色々な曲を弾いて練習してる時、幼かった俺はピアノの足下に座っておもちやで遊んだり、まわりついて．．．。時々お袋の足にしがみついたり．．．。妨害のような事もしたけれど一切怒らないで優しい笑顔でいつも微笑んでくれてね．．．。

お袋の弾く曲が子守歌代わりで、いつの間にか寝ちゃったりして．．．。この楽譜の曲弾いてくれないかな？」

パラパラと見て、練習ナシでまあ何とか弾けそうだったので、「いい．．．いいですけど」と言っ、弾き始めた。

右京は椅子を持って来て、沙那のすぐ側に座りピアノに聞き耳を立てた。

いつも意地悪そうな顔をしている右京はそこにはいなかった。嬉しそうに穏やかな表情……。

「……へえ。この人こんな顔もするんだ……。」

1曲終わると「今度はこれ……お願い」、またもう一曲終わると「次はこれお願い」と、結局10曲ぐらい弾いたかな？

凄く嬉しそうで、「時々弾いてくれないかな？」そう言われた……。

ピアノは好きだったし、沙那も最近ピアノに触れる事が無かったので、結構楽しかった……。

「……そう言えば……今頃気がついたけれど……。」

芦屋の御両親は？ あのお母様は義理のお母様だったの？

「旦那様のお母様は何時亡くなられたのですか？ アツ……聞いてはいけませんでしたか？」

「いや……構わないよ。小学校6年の時に急性心筋梗塞でね……突然だった。その後すぐ親父の愛人が後妻に入ってさ……。親父の奴浮気してたんだ……。」

「えっ……そうだったのですか……。」

「メグちゃんのお母さんは？」

「私の母は6歳の時に病気で亡くなりました」

「メグちゃんもお母さん亡くしてるんだ……。確かアメリカ人だったよね？」

「えっ．．．」

自分で嘘ついてすっかり忘れて、本当の事を話しちゃったわ．．．
「は．．．はい。そうなんですよー」

「もつと教えてよ．．．」

あの鎌倉で見たような冷ややかな顔では無く、柔らかな優しい表情で沙那をジッと見つめた。

「あはは．．．私の事はいいですよ。アツ．．．仕事に戻らないと．．．」

沙那は慌ててモップを抱えて部屋を出ていった。

全然復讐どころではないわ．．．全く隙が無いつて言うか．．．。

こんなにゆっくり右京と2人つきりで話した事も初めてだし、あんな柔らかな表情も初めて見た．．．。

時々本当に同じ人なのかどうかと疑いたくなるような気持ちにもなった．．．。

(第7話に続く)

第7話 隙のない敵

-----あれから数日が過ぎた。

いくら部屋数が多くてスペースの広い家であっても、それ程生活感のない家……。

1日ばかりで掃除するほどでもなく、そんなに一生懸命やらなくても構わないとなれば、時間を持て余し気味でかなりうんざり状態の沙那だった……。

いくら敵陣の家とは言っても、適当に手を抜いて弛れてるのも嫌だし……何とかやる場所を見つけ来てたが……未入居の新築マンションぐらいピカピカになって、もう限界になってきた……。

所長にも別の仕事を回して欲しい希望を出しているが、客の注文でこのぐらいの家規模になると料金も割高で、それが毎日となると、小さなハウスクリーニング会社にとっては大口の顧客と言う雰囲気だ……。

しかも目黒メグ御指名となれば、所長も他の人を回す事も出来ず困っている所だった……。

右京とは、朝、夕に時々顔を合わす事はあっても、平日の昼間には仕事で不在と言うパターンで、沙那にとってそれが唯一救いと言う心境だった。

人の私物を荒らすのは好みではないので、ザツと見て女性の影がないか探りはしているが、全くそんな形跡がない……。

-----もしかして、深雪とは別れたのだろうか？今はフリー？だからと言って、結婚したばかりで不実を働く夫は払い下げだ……そんな安っぽい女じゃないわ！！

そんなある日の事だった……

右京だが、何故か今日に限って外出の様子は無い……。

右京と一緒にいる時間が長ければ長い程、沙那にとっては苦痛だ……。

「あの、今日は出社されないのですか？」

敵の動きを探ろうと思ひ聞いてみる事にした。

「何？俺が自分の家にはいけないのかな？」

いつもながら冷ややかな笑みを浮かべ、含みのある言い方の右京……。

「いえ……いつも昼間にはいらっしやらないから、聞いてみただけです」

あの顔をされて、含みのあるような事を言われるのは苦手だ……。
なんだか疚しいような気持ちになってドキリとする……。

「今日は家で1日仕事をする予定だが……」

「そうなんですか……」

つい声のトーンが下がる……。

何だ……今日は1日いるのか……イヤだな……。

まっ……どうせ書齋にずっと籠って仕事だろっし、敵の存在を頭から消し去って、いないって思う事にしよう、沙那は気を取り直した。

そうこうしている内に昼の時間となり、沙那はキッチンの片隅で持つてきたお弁当を広げ、昼食をとる事にした。

昔は包丁を握った事もなく、インスタントラーメンでさえ作る事の出来なかつた沙那だったが、今では大体のものはつくれるし、味の

方も結構好い線行ってるのでは？と自負している。

お弁当を広げて食べ始めたら、右京もやって来てうらやましそうに弁当を覗き込んだ。

「いいなあ〜おいしそうだな．．．」

うつ．．．そんなに見られると、なんだか食べにくいわ．．．。

そう思っていたら、いきなりヒョイと手が伸びて来て、弁当箱の卵焼を指でつままれて、右京がパクツと食べた．．．。

「うつん。なかなかの腕前だね」

「うそ〜っ！！酷いじゃありませんか！！」

信じられない．．．図々しい．．．何なのこの人は！！

「ねえ、特別手当出すから、何か作ってくれないかな？」

「えーっ！！私．．．部屋の掃除の仕事で来てるんですよ！！」

「その料理の腕前なら、合格！！料理も頼んだ！！」

「そう言われても．．．」

やっぱり図々しい．．．。なんて身勝手な人なの！！

「そつだ．．．！！うちで家政婦やらない？」

「やですよー！！」

「部屋沢山余ってるから、住み込みで働かない？」

「遠慮しておきます！！」

「メグちゃんの会社に直談判してみよう．．．」

「私．．．こう見えても所長から評価されていますから．．．社にお世話になってますし．．．今の仕事気に入ってますし．．．」

「うん。惜しいな．．．メグちゃんならいい家政婦さんになってくれそうなんだがな．．．」

「そう言う事は、専門の業者に頼んで派遣してもらって下さい！！」

「うん。残念だな．．．」

あつたり前よ！！誰が住み込み家政婦なんてするもんですか！！
心の中でべーッ！！と舌を出した。

右京がカップ麺を出して湯を注いでるので、ちょっと気になった。

「いつもそんなものばかり食べてるんですか？」

「ああ．．．。俺、料理なんて作れないし．．．」

「それじゃあ病気になっちゃいますよ」

我ながらお節介だと思いがら、ついつい口をはさんでしまった．．．

昔は栄養面とか全く無頓着だった沙那だが、一人で暮らすようになって、料理や栄養について自分なりに勉強してみてもそれなりの知識も習得して、なんだか気になる．．．。

「そう言われても．．．」

「わかりました！！何か作ってあげますから．．．」

「ほんとう？」

その右京の嬉しそうな笑顔に驚いた．．．。

えーっ！！この人のこんな素直な笑い顔．．．初めて見た．．．。

．．．と言っかなんで私も余計な事を言っちゃったのか！！ あんな奴、病気になるうがどうしようが関係ないのに！！

．．．．．はあ．．．私って、人が良すぎてお馬鹿だわ．．．。

でも．．．父の事を思うと、人が病気になる姿は見たくない．．．。仕事に忙しすぎて、栄養のあるバランスのとれた食事を摂ってなかったし．．．。

私が今みたいに料理が出来て、父の健康の事を気遣ってあげてたら病気になる事も無かったかも知れないと思うと、いたたまれない気持ちだった。

「いいですよ！ 不健康な人を見ていると気分が悪くなるんです！！」

「ありがとうございます！！ メグちゃんが昼食終えてからでいいから、買い物と料理、頼むね．．．」

驚いた！！ 目が細くなるぐらい大喜びの顔．．．こんな見た目事がない．．．。

魂の無い、氷で出来た人間かと思つてのに．．．。

深雪さんにはいつもこうだったの？

魂の無い氷の姿は沙那だけにしか見せてなかったの？
なんだか心の中がモヤモヤグチャグチャした．．．。

「そう言えば買い物もですか？」

「悪い！！ 実は冷蔵庫が空っぽ状態なんだ．．．」

「本当に不健康な生活されてますね！！ もっとバランスのとれた食事しないとダメですよ！！」
叱るように言ったら、頭をポリポリ掻いて、まるで怒られた子供の様な顔をした。

全く．．．今日は見た事の無い彼の姿ばかり見るわ．．．。

「じゃあ冷蔵庫パンパンに摘めておきますから、ちゃんと食事して下さいね！！ もう掃除もやる所が無いからいいですよ、料理もしますから！！」

「嬉しいな！！ やっぱり家政婦やらない？」

「それは．．．無理！！」

ガツクリ肩を落とす右京。

その姿に心の中で笑ってしまった。

．．．．だが．．．その日の夕方、仕事を終えて事務所に戻ったら、所長が青い顔をしていた。

「沙那ちゃん．．．実は、今本社から連絡が入ってネ．．．うちの会社かなり危ないみたいなんだ．．．。実は前々から債務超過数十億と言う噂は、職制クラスの間には出回っていたんだが．．．。で．．．申し訳無いんだが、ちょうど橘さんから家政婦として雇いたい話しを前々から伺っててね．．．お節介ながらいい話したと思うんだ。他の社員にも早めに手を打っておいた方がいい事は追々話してる所なんだが．．．。

私も参ったよ．．．失業は免れそうもないな．．．」

「えええーっ！！」

実は今の住まいはこの会社の社宅だった．．．。

「と言う事は、社宅もでて行かなくては行けないって事ですよね？」

「社宅も抵当に入ってるからね．．．本当に参ったよ．．．」

．．．．それから数日後、ハウスクリーニング会社は倒産してしまった．．．。

あの嬉しそうな右京さんの顔が浮かんでくる．．．。

『やあ．．．メグちゃん！ 本当に大変だったネ。 だけど俺にと

っては、すごくラッキーかな？ 住み込み家政婦頼むよ！』

右京の声と、あの意地悪そうな笑顔が浮かんできた．．．。

ようし！！こうなったら．．．。

そうだ！！かなりメグを気に入ってるから、次の仕事までのつなぎで住み込み家政婦をして、それと同時にメグにぞっこんにさせて、次の仕事が見つかって住居も見つかったらポイント！としてやるう．．．。

愛するものに捨てられる心の痛みを思いしらせてやるう．．．これが私の復讐よ！！

沙那は、心の中の太い毒針を研ぎ澄まし不気味に微笑む、自分の姿が思い浮かんだ。

(第8話に続く)

第8話 敵の陣地へ．．．いざ出陣！！

「いやあ．．．俺としては住み込み家政婦をしてくれる事になって、とても嬉しい展開になったけれど．．．メグちゃんの会社の人達は気の毒なことになったね．．．」

すぐくハイテンションで嬉しそうな右京．．．。ケツ！ニタニタにやけてるんじゃないわよ！！

鎌倉の屋敷にいた時と全く別人じゃないのこの人．．．。

「すみません．．．これからお世話になります。でも良いのですか？ 私、家政婦なんてやった事ないですし．．．私なんかで本当にいいのでしょうか？」

一応、申し訳なさそうな、謙虚な感じに表情を作って、演じてみた。

「掃除の仕事もキッチンとしてくれてたし、料理の腕前もなかなかだし．．．本当！来てくれると助かるよ」

うつ．．．目を輝かせて．．．。凄く喜んじゃってるわ．．．。

「そうですか？ 会社があんな事になってしまったので、私としても助かります」

嬉しそうな表情を作って、凄く喜んでるそぶりを見せた。

．．．．右京について行って、今日から住む部屋に案内された。

「この部屋を使って貰おうと思ってるんだけど．．．。どうかな？」
そう言って部屋の扉を開けた．．．。

．．．．驚いた！！

部屋は前の社宅とは雲泥の差で、宛てがわれた部屋はゲストルーム

用の部屋なのだろうか？

20畳の広い洋間に豪華なクリスタルシャンデリアが下がっていて、その回りには美しいシーリングメダリオン（天井飾り）が施されて、豪華でありながら落ち着いた色合いと雰囲気の入壁紙と、豪華な織の美しい更紗模様のカーテンが更に部屋を際立たせてる・・・。天蓋付きクイーンサイズのベッドに、美しいファブリックのベッドカバー・・・。

それから3畳ほどのウォークインクローゼット、広いバスルーム、パウダールームと言っていいほどの広いトイレ。

ロココ調のドレッサーに、キャビネットに、テレビにBDデッキ、にオーディオセット、ミニキッチン&冷蔵庫まで準備されていた・・・。

「これ・・・って・・・家政婦の部屋って感じじゃありませんけど・・・」

鎌倉の屋敷もこんな感じだったけど、あから3年・・・。質素な生活にも大部慣れて、久しぶりに見る豪華な部屋はとても眩しかった・・・。

「どの部屋もこんな感じだし、使って無い部屋ばかりだから気にしないですよ」

「旦那様お一人でこの広い家に住んでらっしゃるのですか？」

「ああ・・・。それから右京でいいよ。旦那様はちよつとネ。この家には俺しかいないし、そんなに気を使わないでいいから・・・」

「右京さんお一人で住むにしては随分と広い家ですね？」

「まあね・・・」

「それとも、どなたかと一緒に住む予定だったとか？」

「まあね・・・」

「恋人とか？」

「嫌・・・かみさん」

「・・・かみさんて私の事?!」

「は？」

「逃げられちゃったけどね」

「・・・やっぱりそうなんだ・・・」

「当り前だ!! 沙那は心の中でつぶやいた。

でも私と住む予定だったって?! 勘弁して欲しいわ・・・。何考
えてるのかしら？」

「右京さんって、バツイチなんですか？」

「嫌・・・まだ離婚してないから、まだ既婚者」

「まあ・・・そうなんですか・・・!!」

「メグちゃんは？」

「私は勿論独身ですよ!! だってまだ若いですし・・・結婚なんて
当分先ですよ。あまり憧れてないですし・・・」

「沙那はそう言って、コロコロと笑って見せた。

「独身って気楽でいいですよ」

「そうかな？ 恋人いるの？」

「ええ．．．まあ．．．一応」
見栄張つておこう！！

「その返事からして、いなそうだね」
クスリと含み笑いされて、沙那はムツとした！

「わ．．．私、若いし．．．これから沢山恋をしますから！！
それで、誠実な素敵な人見つけて．．．」

「そうなんだ．．．」

「そう言えば．．．。私がここに住んで奥様に悪くないですか？」

「嫌．．．だって別に疚しい間柄じゃないし．．．住み込みの家政婦をお願いしてだから．．．」

「．．．．．愛人が居た身ですものね、このぐらいなんとも思わない
でしょうね．．．。」

「奥様が気になさらないのなら、まあ私としても助かります．．．。
で．．．奥様は何時お戻りになるのですか？」

「．．．．．まつ、あなたの奥さんは、もう戻る事はないわね。」

「それがね．．．分からないんだ．．．」

その時遠い目をして右京の顔が曇った．．．。

「あ．．．余計な事言ってしまったってすみません」

なんでそんなに淋しそうな顔するのかしら？自分の蒔いた種じゃな

いの。

「じゃあ荷物を部屋に運ばせて頂きますね」

「手伝うよ．．．」

引越しの荷物を見て、殆ど何もない状態だったので右京がぼつりと言った。

「メグちゃんは質素なんだね．．．」

「はい．．．両親は他界してもういませんし、身寄りありませんし．．．。何でも身軽なんですよ」

「そうなんだ．．．」

ちよつと淋しげな、同情するような曇った表情をしたのでちよつと驚いた。

そんな思いやりのある人だったかしら？

なんだか調子狂うわ．．．。

「じゃあさ、今日は引越して疲れてるだろうし、一緒に出かけないかい？」

「え？」

「何か食べに行こう」

「は．．．いい」

一瞬どうしようか迷ったけれど、素直に従う事にした。

「何がいいかな？」

「私．．．好き嫌いですし何でも大丈夫です」

「じゃあフレンチなんてどうかな？」

「あ．．．あまり高級なお店は困ります。安い所で．．．あ．．．
じゃあ、すぐ近くのファミレスはどうですか？」

「いいけど．．．遠慮しなくてもいいんだよ」

「いえ．．．。そう言うお店の方が気が楽ですから．．．」

「そうかい？それなら．．．」

* * * * *

ファミレスの席に座ってからお互いにメニューを広げた。

「右京さんってセレブだから、ファミレスなんて入った事なさそうですね」

「初めてって言う訳でもないけれど、あまりないかな？」

「右京さんのイメージだと、ボンキュ！って感じのセクシーな彼女連れて、高級外車乗り回して、オシャレな高級フレンチとかイタリアンって感じですね」

ちよつと意地悪そうに言ってみた。

「そうかい？」

「右京さんの奥さんって．．．どんな人かな？」

「気になる？」

「当ててみましょうか？」

「いいよ」

「年は右京さんぐらいで．．．髪は栗色のワンリングスのソフトウ
エーブっぽい感じで、胸が大きくて、セクシーで．．．

胸元は大きくあいているミニ丈のワンピースに10センチ以上のヒ
ールを履いている人！！」

これは、深雪さんだ．．．。さあどついう反応を示すかしら？

「当りでしょう？」

「残念！！そう言うタイプは全然好みじゃないね．．．」

「えっ？」

顔色変えるかなって思ったのに、案外とアツサリと躲されたわ．．．

疚しいって思わないのしら？

なんか意外な事言うわね．．．あなたの愛人はそんな感じだったじ
やない．．．。

「俺の愛妻は．．．澄んだ大きな瞳に長いまつ毛で．．．好奇心旺
盛で人を疑う事を知らないような純粹でもっと若い子．．．」

「へ．．．え．．．なんか意外ですね」

「．．．．．愛妻だって？良く言うわ！！」

「で．．．その奥さんは今何処に？」

「それがちよつと行方不明．．．」

「エッ．．．それって不味くないですか？」

「．．．．．確かに．．．ここにいるものねー!!」

「一度、見つけて連れ戻そうとしたら逃げられてね．．．
すぐくばつの悪そうな顔の右京．．．。」

「まあ．．．逃げられるぐらい酷い事しちゃったのですか?」

「．．．．．したわよね!!もうとんでもないぐらいの酷い事を．．．
。」

「ああ．．．色々とね傷つけてしまっただけ．．．それには色々と言
があるんだけどね．．．。」

「．．．．．訳? 言い訳なんて今更って感じだわ!!」

「それって．．．もう諦めた方がいいんじゃないですか?」

「そう思う?」

「こう言っちゃ失礼かも知れませんが．．．かなり．．．嫌わ
れてるかも．．．。」

力を込めて言ってみた。嫌ってますわよ!!右京さん!!

「なのかな?」

興味津々の目で沙那を見つめた。

「たぶん．．．。」

真顔で答えた。

「嫌!!諦めない!!」

その途端、駄々っ子のような顔に変わって、否定してきた。

沙那は呆れた．．．『なんでーっ!』

「何ですか？」

．．．．あ．．．つい感情が籠って声が裏返ったかしら？

「執着!！ 愛してるし．．．」

ウソウソ．．．愛してるですって!！良く言っわ．．．。

執着？気持ち悪すぎ．．っ!！

「執着ですか？ それって．．．キモイかも．．．」

苦々しい顔で右京を見つめた。

「なっ．．．キモイ?!」

その言葉に目が点状態の右京．．．。

「ですよ．．．私が奥さんだったら、嫌だなあ。壊れちゃった愛は執着しないのが1番ですよ!！ 奥さんを手放して、自由にさせてあげるのも愛情ですよ!！」

「そうかなあ．．．」

沙那は大きく首を振ってうなづいた．．．。

「じゃあ．．．離婚して．．．メグちゃんとやりなおそうかな？」

そう言っつて右京が魅惑的な目をして沙那を見つめてきた。

「ハアーツ？ なんですかそれーっ!！」

つい声を荒げて言っつたので、回りのお客さんが一斉に沙那の方を見た。

視線を感じてその後小さくなった．．．。

「メグちゃんってなんか、かみさんに似てるんだよね．．．」
腕を組んで顎を乗せて沙那をじーっと見てきた。

「ヤダツ！！ キモ過ぎます．．．！！ 私無理！！ オッサン趣味してませんから！！」
力を入れて拒否った。

「お．．．お．．．おっさん？！」
物凄い驚きの表情をして、その顔が可笑しかった．．．。
目が点だー！！

「チエツ．．．」
口を尖らせて不貞腐れる姿がまた可笑しくて、沙那はお腹の中で笑い転げた．．．。

「ま．．．まあ．．．早くメニュー決めましょうよ！！何にしようかなあ〜。あつ．．．これ美味しそう！！」
沙那はルンルン気分だった！！

(第9話に続く)

第9話 父の墓前で・・・

－ － － それから元夫との奇妙な同居生活が始まった。

まだ離婚は成立してないから、今でも夫は夫なのだが・・・沙那にしてみたら過去に美しい洋服にくつついてしまった染みのようなものだ。

沙那が朝食の準備をしていると、ダイニングの自分の席に座り、嬉しそうにテーブルに並ぶ料理を眺めてる右京・・・。

沙那に全く関心を示さなかったあの右京が・・・柔らかな表情で目黒メグの動きを目で追って・・・。

その視線が沙那にしてみたらとつてもウザイ！！

一人で食べる食事は美味しくないからと、一緒に食べて欲しいと懇願されて、いつも2人前テーブルに並べ・・・。

元夫と一緒に食事だ・・・。

朝食メニューは、卵焼きに、アジの干物、ご飯、大根と油揚げの味噌汁、味付け海苔、野沢菜の漬物、納豆・・・。

鎌倉の屋敷では、イングリッシュブレックファーストが定番だった・・・。

あの高慢ちきな右京に、渋い和食の朝食はなんだか似つかわない感じ・・・。

このゴージャスなダイニングルームにも似つかわない・・・。

「本当にこんな料理で良いのですか？ 私の作る料理って、庶民的な和メニューが多いですし。」

右京さんのような大企業の社長さんなら、腕のいいシェフの料理を食べたり・・・家には執事がいて、沢山のメイドさんに囲まれてた

りして・・・ハイレベルの生活を送ってそうなんですけど・・・」

「まあ・・・鎌倉に本宅があるし、その暮らしはそんな感じなんだがね・・・。本社も近いしね」

「じゃあどうしてここに一人で住んでるのですか？」

「新しいプロジェクト立ち上げで、その新オフィスを今こっちで準備中と言うのもあるし・・・。かみさんのこともあるしね」

「奥様の？」

「このままには出来ないし・・・」

「で・・・手がかりは？」

「うん。それがね・・・」

「そうなんですわ。見つからなかったら？」

「諦めない!!」

固い決意のような真直ぐな目で、沙那を見た。

「結構頑固なんですね・・・。逃げられる前にもっと奥さんを大事にしてたら良かったのに・・・」

決心を挫くような言葉をサラリと言う・・・。

「だよね・・・。あの時は仕方無かったんだがね・・・」
ガツクリと肩を落とす右京・・・。

「……仕方がなかったって……。愛人に夢中で、かわいい奥さんはおざなりだったって事かしら？
なんて自分中心の人なのかしら？」

「もし奥さんが見つかったらどうするんですか？」

「必死で説得して戻って来て貰うつもり……」

「……あくそれ、無理ですから……」

「それでも嫌だって言ったら？」

「聞く耳持たない！！諦めない！！」

その言葉にゾワツとした。

「……うん。まだ雲隠れしていた方が良さそうだわ……。まさか離婚にこんなに手間取るとは……。もろ手を上げて喜んで、深雪さんと再婚すると思ってたのに……」

「そ……。そうですか……」

食事を終えて身支度して、仕事に行く右京……

「今日は何時ぐらいに戻られますか？」

「今日は仕事が入っているから帰宅は深夜になると思うし、夕食の準備はしなくていいから……」

「そうですか……」

「俺も帰宅が遅くなるし、家の用事が済んだら自由にしてみたいよ！何処か出かけても構わないし……」

「えーっ！！いいんですか？」

つつい嬉しくて、目が輝く沙那。

「ああ……。朝帰りしないで今日中に帰って来るんならね……。にやりと意地悪そうな笑みを浮かべ茶化す右京……。」

「夜遊びなんてしませんよ!！」

「じゃ行ってくるよ」

「いつてらっしや〜い」

嬉しそうに浮き浮きする沙那の様子に若干不審そうな表情をしていた右京だが、何も言わずに出ていった。

「やったわ〜!！」

右京がパタリとドアを閉めて出て行ってから、沙那は恐ろしいほどの猛スピードで家の用事を済ませ、出かける準備をした。

今日は父の命日……。お墓参りに行かないと……。

一応万が一の事を考えて、変装していく事にした。

天国のお父さんなら、私がどんな姿をしても気付いてくれるよね？

こんどは何キャラにしようかしら？

* * * * *

父の眠っている霊園は、整備された広い芝生に、四季折々の花々が木々が溢れてる日当たりの良い、美しい洋風庭園風の、開放的で美しい所だ。

素敵な大きな噴水の回りにはベンチが転々と並んでいて、訪れた人がゆっくり花々を見ながら休憩したりもできるし、すぐ近くにはバロック調の美しいセレモニーホールもある。

父の墓前に行ったら、すでに花が供えられていた。白を基調として上品な淡いピンクや淡い紫が主張しない程度に混ぜた、素敵なアレンジの供花だった。

高価な花も混ぜた高そうなアレンジ……。

「一体誰が……?」

その時後ろから声をかけられた。

「あの……」

ふり返ったら、年は50代半ばの小柄で優しそうな男性だった。

その人には見覚えがあった……。

「もしかして……玉城さんですか?」

「えっ? すみません……どなたでしたでしょうか?」

その男性が驚いた表情をした。

「あ……すみませんこんな格好で……。」

オレンジブラウンカラーのショートウィッグに、大きめのキャスケット帽に、薄く色が入った眼鏡とリネンのチュニックにジーンズ姿の沙那……。

「沙那です……和泉善蔵の娘の……。」

玉城は、父の繊維会社の工場長で、会社に惜しみない尽力を注いできた掛け替えのない方だ。

特殊繊維の件でもかなり力添えしてくれた人だ……。

「えええーっ。和泉社長のお嬢さんでしたか……。」

物凄く驚いて、信じられない様な表情の玉城。

それもそうだ……あの頃は、ロングヘアーでお嬢様風なフェミニンな格好ばかりしていた。

ボーイッシュな格好なんて、想像もつかないだろう・・・。

「すみません。ちょっと右京さんに見つかると不味いので・・・」

「えっ?」

さっと顔色が変わって驚いた感じだ。

「離婚考えてるんです」

「ええっ! そ・・・そうなんですか!!」

驚いた後に、一瞬、何か言いたげなそぶりを見せたが、口をつぐんだ。

「このお花は、玉城さんが供えて下さったのですか?」

「はあ・・・私だけではなくて・・・皆で・・・」

ちよっとオドオドした表情をしていたが、沙那の豹変ぶりに戸惑っているのかも知れないと思った。

「こんな素敵なお花を父に・・・ありがとうございます。

あの時はまだ子供で、なんのお役にも立てなくて、会社が解体されて売り払われて・・・何と言っていいのか・・・」

「いいえとんでもないですよ・・・和泉社長と橘社長のお陰で・・・」

「

「えっ?」

橘社長つて・・・右京さんの事?

「沙那さんはちよっと誤解してるかも知れませんが・・・和泉繊維

第10話 右京の意外な側面

「……玉城さんの話して……誤解って一体なんだろう?!」

玉城から話しを聞く為に大きな噴水のある憩いの広場に移動して、綺麗に植栽されたコニファーの傍にある少し奥まったベンチに腰かけた。

途中、自働販売機で玉城が缶コーヒーを2つ購入して、沙那に1つ渡した。

「宜しかったらどうぞ……」

「あ……ありがとうございます」

「実は……まだプロジェクトの途中段階なので……はっきり私の口からは詳細は言えないのですが……」

和泉繊維の繊維工場は残ってます。

確かに大まかな事業所は解体、売却されて、残っている物は橘コーポレーションの子会社となり、傘下に収まりましたが……」

和泉社長が残したかった物は橘社長が受け継ぎ、もう少しで社員達と私の夢でもあり、社長の夢でもあったそれが、近い将来に実現できるはず……いや……そうなりますと断言してもいいです」

「え……?」

「橘社長は、和泉社長の意志をしっかりと受け継いでますよ。お二人に何があったのかは良く分かりませんが……橘社長は頭も切れるし、実行力、統率力もあるし……。お若いのに良く出来た方ですよ。」

沙那さんと何があつたのかは分かりませんが．．．一度お戻りになつて、もつと良く話しあつた方が良いと思いますよ。

もし．．．信じられないのなら、一度お時間のある時に和泉繊維工場を見にいらつしゃって下さい。

お嬢さんが幼い頃から社長といっしょに時々見学に来られたあの頃と変わらずに、フル稼働して社員一同頑張ってますから．．．」

「本当に？　まるで狐につままれたような気持ちです。

なんか．．．玉城さんの言っている右京さんと、鎌倉の屋敷で私が目の当たりにした右京さんとは全く違う人みたいで．．．信じられないような気持ちです。結構辛い目にあつてきたから．．．」

「沙那さんにそんな酷い事をする方には、すみませんが．．．私には信じられない気持ちです。本当に素晴らしい方なんですよ」

「そつなんですか．．．」

「まあ．．．あまり短絡的に物事を進めないで、じっくりと時間をかけて社長と話しあつて、真実を見極めた上で決断された方がいいと思いますよ」

「どつちみち、彼の方が離婚を渋ってますから．．．簡単にはいきませんし．．．」

「まあ．．．夫婦の問題は私が口を挟むような立場ではありませんが．．．とにかく．．．和泉社長の意志は橘社長がしっかり受け継いで頑張つて下さってますから．．．。安心して下さい」

「はい．．．。繊維工場が今も残っていて、稼働してるという話しを聞いて私も救われた気持ちです。そのうち見学に伺わせて下さい

ね

「是非．．．。それから．．．さつきは言いそびれたのですが．．．あの供花ですが．．．沙那さんがいらっしやる少し前に、橋社長が．．．」

「え．．．そうだったのですか．．．」

「．．．驚いた．．．父の命日を覚えていたんだ．．．。なんだか右京さんの事が分らなくなって来た．．．。鎌倉の屋敷ではあんな酷い事したくせに．．．。今更．．．色々な話しを聞かされてもそう安々と許せる気持ちにはならないわ．．．。」

* * * * *

玉城さんは新しいプロジェクトの事で、かなり忙しい日々だったらしい．．．。

連日徹夜続きで、それを知った右京さんから今日は休暇を取ってゆっくり休んで疲れをとるようにと言われて、父のお参りにきて下さったそうだ。

そんな気配りの利く人なんだ．．．和泉沙那には冷たかったのに．．．。まるで二重人格じゃないかって思えて来る．．．。

．．．玉城さんには今度工場を見に伺いますって話したが、何となく工場の事が気になって、そつと様子を見に来てしまった。今日は外からそつと様子を見るだけにして、右京さんが居なそうな日を見計らって見学させてもらおう．．．。

工場の敷地周辺の道路を歩いて、フェンス越しに時々首を伸ばして様子を伺った。

微かに聞える布地を織る機械音……。懐かしい……。工場をぐるりと一周して帰ろうと思ったら、丁度工場の就業時間となり社員がゾロゾロと正門から出てきた。

広い通りの反対側からその様子を何気なく見ていたら、あれ……。知ってる人がいた……。その人を慌てて追いかけた。

「所長さん!!」

そうです!!ハウスクリーニング会社の所長さん……。

「え……。どなたでしょう?」

しまった……。今日も変装してるんだった……。

「橘沙那です」

「えっ?えええーっ!!」

目黒メグに変身した時も椅子からずり落ちそうに仰天してたけど、今日もそっくり返って尻餅つきそうに驚いている。

「沙那ちゃん?」

所長に話しを聞けば、右京さんが家の掃除の件で、目黒メグを専属にして貰うように頼んだり、住み込み家政婦の交渉などでしょう。ちゆう連絡をとりあっているうちに、会社倒産の事を知り気の毒に思っつて、工場で働かないかと誘ってくれたらしい……。

あの会社で、就職先が決まらない人数人も、工場の作業員として雇ったそうだ……。

所長さんも玉城さんと同じように、右京さんは素晴らしくいい人だと何度も言っていた……。

なんだかスツキリしないと言うか、モヤモヤする日だわ．．．。

右京さん！！本当のあなたはどんな人なの？それとも、沙那にだけは冷たい人だったの？

他の人が口を揃えて良い事を言っても、私には素直に聞き入れられないようなそんな気持ち．．．。

．．．．．なんで沙那にだけはあんな酷い事をしたのですか？ただ嫌いだったから？

（第11話に続く）

第11話 メグとデート

あれから気分はモヤモヤしたままだった……。皆、口を揃えて、『橘社長は素晴らしい人です』って言うし……。家に居れば居たで、目黒メグにはいつもニコニコ優しいし、時々愛おしそうな表情でメグの姿を目で追ってるし……。

和泉沙那 目黒メグ

自分で勝手に作ったキャラだけど……。ムカツク!!
姿形が変わっただけで、中身は全然変わらないのに……。
ハーフ好みなの？ 深雪さんのように豊満で色香の漂う人が好みなの？

なんで和泉沙那だけには冷たくしたのですか？

……。そんなある日だった……。
今日は右京は会社が休みの日……。休日出勤も多いが、一段落したのか今日は一日家にいるらしい……。
気が重いなあと思っていたら、右京が突然メグにデートを誘って来た……。

誘ってくる前から変には思っていた。

いつも目でメグの姿を追ってる感じはしたが……。今日はソワソワとなにか落ち着かない雰囲気で、時折話したそうな様子が見受けられた。

……。そしてついに……。

「ねえ……。メグちゃんて今日予定あるかな？」

「いえ．．．。特にはありませんが．．．」

「それなら一緒に出掛けない？」

「はあ？右京さんと一緒にですか？」

「そう」

「それってデートって事ですか？」

「そんな固くるしい意味ではないけれど、まあ一緒に何処かに出かけないかなと思って．．．」

「それって十分デートの誘いっばいのですけれど．．．。既婚者が独身女性とデートは不味いですよ！！」

「いいじゃない．．．。かみさん行方不明中だし．．．離婚したいって迫られてるし．．．。一度メグちゃんと一緒に出掛けてみたいなって思ってたんだ．．．。もつとメグちゃんの事を知りたいって言うか．．．。嫌かな？」

「嫌って程でもありませんが．．．」

正直言うと『沙那って言う可愛い素敵な奥さんがいるのに、メグにデート申し込んでるの？』と驚き、呆れた。そして、『右京の馬鹿！！ このエロ親父！！』って心の中で叫んだ。

心の中は怒りで頭のウィッグが何処かに吹き飛ばかと思ったけれど、妻のいる身で独身女性のメグに好意を持って誘ってくるって事は、これって立派な浮気の部類に入るわよねと思った．．．。

この事を盾にして、離婚を迫れるかもしれない．．．。これはチャンスだっと思った。

「……これが右京の本性なんだ……。
他の人がどんなに素晴らしい人だって言っても、経営者としてどんなに立派でも、女性にはとてもだらしがない人……。
そうだからこれがこの人の本当の姿なんだ……。女癖が悪い人……。」

「何処か行きたい所ない？」
凄く嬉しそうに、頬を染めて聞いてきた。

「ようーし！！こうなったら……。」

「遊園地！！！」

「は？」

「遊園地に行きたいです」
私はある悪知恵が浮かんだ……。
結構絶叫マシーン系が得意な私……。
いっぱい乗って、右京さんの腹の中をグチャグチャにかき混ぜて、目をグルグルにさせてやるわ！！と思った。
後は写メを沢山撮って、浮気現場の証拠写真にしないと……。

「わかった。行こう……。」

ちよつと戸惑ったような顔をした様に見えたが、大好きなメグちゃん直々に誘われちゃあ嫌とはいえないわよね……。
心の中で『ウシシシ……』と思った。
右京め！！罠にかかったわね。

都内の大きな遊園地に到着して、沙那は高いビルを越えて、向こう側までレールが延びているジェットコースターを指さした。

「右京さん、あれ乗りたい．．．」

「あれに？」

見た感じ、青ざめてビビっているように見えた。

憎つくき敵め！！罨に食らいついてきたわね．．．。

『よっしゃーっ！！』

「サンダードルフィンか．．．いいよ。10回ぐらい乗る？」
ニヤリいつもの様にちよっと思気そうな笑を浮かべた。

『あれ？』想定したのとは、反応がちよっとうわ．．．。なんでえー？

「行こう！」

さっと手を繋がれて、ドキリと心が弾む。

そう言えば、結婚して鎌倉の屋敷にいた時には、いつも遠目に右京さんを眺めてるって感じで、こんなに側にいた事なんてなかったわ。ましてや手を繋いだのって初めてじゃないかしら？

ひんやりしてるけど、大きくて細長い指で、優しく包み込まれてるみたい．．．。

少しドッキリした。その後に、私は『メグ』だと悲しくなった。

ジェットコースターに乗り込んで『しまったー！！』って思った。

絶叫系は結構得意だと思っていただけ、こんなにレールが高くて激しそうなのは初めてだった．．．。

思ったよりも恐そうだ．．．。急に恐くなった。

「メグちゃん、顔が青いけど大丈夫？」

「なんか．．．恐いーっ」

不覚にも、泣きべそをかきはじめてしまった。

「大丈夫!!俺がついてるよ」
フツと愛おしそうな優しい目で見つめられて、手を両手で優しく包まれて、頬にキスされた。

「えっ?」
それから後は、心臓が激しく鼓動し始めた事と、突然キスされた頬の、ふわりとした右京の唇の、柔らかくて温かい感触を何度も思い出して、心地良く酔いしれていた事だけしか頭になかった。
キスされたなんて生まれて初めてだった。。。

結婚して夫だつたくせに。。。
今初めてキスされた。。なんだか無性に悲しかった。。。
そして。。なんでこんなに心が騒めくのだろう。。。この気持ちちって。。。

『やっぱり、右京さんの事。。好き。。なのかも。。』
復讐してやろうと思ったのに、右京の魅惑の毒にすっかりやられてしまってる。。。
。。。
太い毒針を刺してやろうと思ったのに。。刺されたのは私の方だ。。。

。。。。なんか疲れたな。。。

「静かになっちゃったけど、大丈夫?」
ジェットコースターを降りてから、沙那は無言になった。
ジェットコースターが恐かったからじゃなくて、なんだかメグを続ける事が嫌になってきた。

沙那は繋がれてた手を振りほどいて、怒った顔で言った。

「右京さん、私は目黒メグじゃない!!」

「え?」

右京の驚いたビー玉のような瞳を見て、こんな顔を見るのも初めてだなぁと思った。

メグには心を開いて、色々な自分をさらけ出すのね。

「私の事分らない?」

全てを告げて、もうこの状態を終らせようと思った・・・。

目黒メグが浮気現場の証人だから、もう逃げられないし、私も逃げない・・・。

離婚を勝ち取って、この状況を終らせよう・・・。

(第12話に続く)

第12話 右京の正体（最終話）

「私の事分らない？」

険しい表情で、右京を真つ直ぐな目で見据える沙那。

分からないって言ったなら、正体を明かしてやるう．．．そしてジ・
エンドだ．．．。

「．．．．．」

困った顔をして、考え込む右京。

沙那が次の言葉を発しようとしたその時だった．．．。

「実は知ってる」

悲し気な表情をして、ポツリとつぶやいた。

「え？」

「沙那．．．」

「ええええーっ」

うそーっ。すでにバレてたの？

「初めから分かってたし、君がこの3年間どうやって生きて来たかもずっと追跡調査して実は知ってたんだ．．．」

思いもよらない展開に、腰が抜けて、側にあつたベンチにドスンと腰かけた。

「初めからバレてたの．．．？」

「ああ。全て．．．」

右京は沙那の隣にそっと座った。

「知ってて騙されたふりをしていたのですか？」

「ああ」

「じゃあ、住み込み家政婦にスカウトしたのも、わざと？」

「ああ．．．」

「ハウスクリーニング会社が倒産したのもあなたの仕業？」

「それは違うんだ．．。会社が厳しい状況だと言う情報を少し前に仕入れたから、家に来るように仕向けて住み込み家政婦の話しを君にしたんだ。

失業して君の居場所が分からなくなると困るし、心配だったし．．．

「

「ずっと．．．ずっと騙されたふりして、私の事馬鹿にしていたのですね．．．」

1人芝居していい気になって、実は自分が騙されていたと知って悲しみが込み上げて泣き出してしまった。

「お．．．おい　おい、そんなに泣くなよ」

大泣きする沙那を見て、回りが何事かとじろじろ見る。

「私、家政婦やめます。あの家出ます」

「お願いだ！　出ていかなくてくれよ．．．」

右京は沙那を抱き寄せ、自分の思いを伝えるように、ぎゅっと抱き

しめた。

「鎌倉にいる時には指一本触れなくて、私の事、無視したくせに！」
抱きしめられていた体を、手でグイと押し返して、つき放して、泣きながら恨みがましい目で右京をジーツと見上げた。

「そんな目で見ないで欲しいな．．．。あれには訳があつたんだ．．．。」
「。」
両手で沙那の手を包み込んで、にじり寄ってくる．．．。

「どんな言い訳があるんですか？」
右京に包まれた手をパツと離して、睨みつけた。

「沙那のお父さんに頼まれた事があるんだ．．．。」

「え．．．父に？」

「君のお父さんは、特殊繊維の開発に、莫大な額の研究費を投じてた。」

で、相当な額の負債を背負い込んでしまっていたんだ。

特許を取得して、これから製品化と言う時に病気が分かって．．．。

沙那も分かっていたかと思うけど、お父さんの回りは敵ばかりだった．．．。

親類一同も、私利私欲の固まりになった人達ばかりで．．．。

それで、できるだけ社員を保護しながら、和泉繊維社を上手に解体して売却、負債をそれで返済してくれと言われた。

そして一番のお父さんの望みは、特殊繊維の特許権を俺に守って欲

しい、そして、製品化して世に出して欲しいと言われたんだ。

君と結婚したのは、特許権を守る事も含まれてた．．．。
スムーズに最速で、お父さんの会社の和泉繊維社 社長となるには
婿の立場になるのが最適だろうと、お父さんと相談して決めただ。
高額な負債を肩代わりするのに、うちの社の者にも納得させられる
ような理由が欲しかったしね。

もちろん沙那の事も気に入って承諾したけど、あまりにも急だった
から、まだゆっくりお互いの気持ちを確かめたり恋愛する状況じゃ
なかったし．．．。

沙那はとても若かったし．．．大切にしたかったし．．．本当に夫
として認めて許してくれるまでは、関係を持つてはいけないと思
ってたし．．．」

「でも、深雪さんって愛人がいたじゃありませんか．．．」

「あの子は、君の伯父さんの愛人だよ」

「え？」

「君のお父さんは急に婿になった俺の事を100%信じきったわけ
じゃなかった。

会社の事も、沙那との結婚も、あまりにも急だったから．．．。そ
れだけお父さんには時間が無かったから急がなくてはいけなかった
のだが．．．。

俺が裏切ったりしないか、沙那の事を大切にしてくれるか不安だっ
たんだ。

だから最後の切り札と言うのだろうか．．．。

特殊繊維の一番重要な情報の書類をいつも自分の手元に置いていた。
もう大丈夫だっって見極める事が出来たら、俺に渡そうと思っていた

らしいんだ．．．。

常に入院している自分のベッドの枕の下に入れてたんだ．．．。
だが弱り切って意識が朦朧とし始めた時、君の叔父さんがそれを盗
んでしまった．．．。

いざ盗んでみたが．．．その情報だけでは全く役に立たない．．．。
私が君のお父さんから受け継いだ、特殊繊維のデータが無ければ
全く役に立たない物なんだ．．．。

だが．．．。俺の方も、あのデータが無ければ特殊繊維は完成し
ない．．．。

君のお父さんが亡くなられたあと、互いに情報入手しようと攻防
戦が始まったんだ．．．。

で．．．あの女性を刺客というかスパイとして俺の元に送り込んで
きた．．．。

もう一人、あの屋敷に敵の息のかかったメイドも．．．。

それが誰なのかがなかなか分からなくてね．．．。

深雪の挑発に乗ったふりをして、それを敵のメイドにみせつけるよ
うに演じてた。

それに深雪をこちらにとり込むようなふりをして、情報を取り戻そ
うと躍起になってたし．．．。」

「それで濃厚なキスシーンを演じていたわけですか？」

「あれを見てしまったんだ．．．。」

冷や汗状態の右京．．．。

「確かに、『毒を以て毒を制す』様な事はしてしまっただが．．．。」

「で、いかがでしたか？」

ふてくされた顔で蔑むような目で睨んだ。

「沙那の方がいいな．．．」
詰め寄ってきた沙那に、切なげな目をして右京はゆっくりと顔を近づけてきた。

お互いに目と目を見交わせて、沙那のくちびるにゆっくりと右京のくちびるが接近してきた。

「つまらないです」
スックと立ち上がって、右京のキスをかわした。

「3年間1人で、自分の力で生きて来れたと思っていたのに、結局右京さんの庇護の元で生きて来たって事だったのですか？」

「いや、沙那は1人で自分の力で頑張ってきたよ。万が一の時にはそっと手助けしようと思っていたけれど、その必要もなかったし．．．」

それに苦労している沙那の様子を見ると心が痛んだよ．．．」

「結局右京さんの手の上で、転がされてただけの気がしてきます」

「俺がすがりついてたんだよ。沙那を手放したくなかったし．．．。必死で追いかけて続けたんだよ」

なんだか納得いかない様な、モヤモヤした気持ちが溢れてきた。

「右京さんを信じていいのか、分からなくなりました。3年間、私を放っておいたくせに！」

「情報を奪い返したらすぐ迎えに行こうって決めてたんだ．．．。だから、半年後に君を連れ戻そうとしたけれど．．．君の気持ちは

頑なになってしまっていて、時間が必要だと感じたんだ．．．。それに和泉繊維社内の負の人材を一掃するのに時間がかかったのと、特殊繊維の製品化にも時間がかかってしまったんだ．．．。お父さんの望みを叶えてあげたかったし．．．本当に悪かったと思ってるよ。どうか許して欲しい．．．。」

「じゃあ、私を遠ざけたのはどうしてですか？」

「財産目当てで和泉家に婿に入った冷酷なやつって思わせておかないと、沙那を拉致して脅しをかけて、特許権を奪おうとする恐れがあったんだ。」

沙那に手を出しても、夫の方は愛情がないから意味が無いように見せかける為だった．．．。

屋敷内にはスパイも潜んでいたし．．．。

本当は、沙那の事思ってたんだよ．．．。

離婚するって言われて、家を出て行かれた時には本当にショックだったし、悲しかったし、すぐにも連れ戻したかった．．．。」

「本当に？」

「本当だよ．．．だから少しずつ君の心の固まりがとれるように、側にいて見守ってたんだ．．．。許してくれそうな雰囲気になったら、君の正体を知ってる事も話すつもりだったし、やり直して欲しいと願ってるつもりだった．．．。」

「離婚届は？」

「即破って捨てた。お願いだ．．．もう一度俺の所に戻って来て欲しい」

「あなたに仕返ししてやろうと思っていたのに・・・」

「本当にごめん。悪かったよ」

今までであった辛い事を思い返すとなんだかスッキリ出来ない所はあるけれど、必死でお父さんの特殊繊維を守ってくれたんだ・・・。和泉繊維だって、あんなに高額の負債を抱えてたけど、倒産しないで上手に解体（大体は、右京さんの社の子会社に吸収合併されたから、社員は路頭に迷う事もなくて済んだ・・・。）あくどい事も平気でしそうな親類連中は社から遠ざけて、もう手出しできないし・・・。

結局全て右京さんのお陰だ・・・。

「今回は大目に見てあげます。でも、刺客を送られて来ても、もう私以外の女性とはキスもダメですから!!」

「沙那・・・」

右京が抱きついてきて、強く抱きしめられた。

「私以外って言ったよね？　じゃあ許可って事かな？」

「しまったー!!」

飛んでもない事を口走ってしまった!!

「さあどうでしょうか？」

慌てて惚ける沙那。

「そうそう・・・。深雪さんとは寝ちゃったの？」

下から睨むように右京の目をジッと見る沙那。

「な・・・。突然に本当に・・・キス意外してません!!」

真っ赤になつて、焦りまくる右京．．．。
まるで悪い事をして怒られた子供の様だ．．．。

「キスはしたのね！！って言うか目撃したから嘘つけませんしね！
！」

「はいはい．．．キスはしました。どうか許して下さい！！」
平謝りの右京．．．。

「ふんっ！！」

「困つたなあ．．．」
頭を掻いて、苦いお茶を飲んだような顔の右京．．．。

「ねえ、目黒メグちゃんも可愛いとは思っけど、橘沙那さんに戻つて欲しいな．．．」

「え？」

ドッキリ．．．。

自分の作つたメグにちよつぴり焼きもちを焼いていた、さつきまで
のことを思い出すと恥ずかしくなった。

「橘沙那さん、もう一度．．．俺の奥さんに戻ってくれないかな？」

「さあ．．．」

「えっ？」

凄く不安げな顔の、初めてみる右京の顔がやけに少年ぼく見えて可愛らしいと思つた。

「どうしましょう．．．気ままな一人暮らしも楽しくなりました」

「そ．．．そんな．．．」
益々悲痛な顔になってくる右京．．．。

「嘘ですよ。今まで辛い目にあわせた仕返しです」

「じゃあ戻って来てくれる？」

「はい」

「良かった！　すごく嬉しいよ」

その後、優しくキスをされた．．．。

賑やかな遊園地の騒めきが、一瞬消えて、時が止まったかのように思えた．．．。

赤坂のマンションに戻って来て、昨日まで家政婦だったのに、今日からは奥さん？！

不思議な感じがしてくる．．．。

それにね、心臓がドキドキしてくる．．．。

えーっ！！今晚襲われちゃうの？

目黒メグは着替えて、橘沙那に戻った．．．。

その姿を見て、右京が言った。

「やっぱり橘沙那の方が、目黒メグよりも全然可愛いな．．．」

沙那がおちゃらけて言った。

「メグキャラもかなりいけてたと思うのだけどなあ．．．」

「あのキャラは強烈だったよ！ 確かにハーフっぽく見えた」
右京がクスリと笑い出し笑いする。

「しかしさ、ジェットコースターでベソかいてたのに、何で遊園地に行きたがったのかな？」

沙那がああ時の自分の姿を思い出して、首をすくめて赤面した。

「あのね．．．私、絶叫マシーン系は結構得意だと思ってたの。
だから、憎たらしいあなたに復讐してやれって、ギャフンと言わせ
てやろうと思って．．．」

いっぱい恐い乗り物乗って、右京さんの腹の中をグチャグチャにか
き混ぜてやるわ！！と思っただけだなあ．．．」

「なーんだ。俺さ、全然平気なんだよね．．．」

ちよつと怒った顔をして、沙那を睨みつけながら顔を近づける。

「ふーん。でもさ、俺のお腹をグチャグチャにかき混ぜるなんて．．
．．そんな事企んでたのか．．．」

「だ．．だ．．だつて！ 意地悪ばかりされて、憎たらしくて悔し
かったんだもの」

顔を接近されて、真っ赤になって後ずさりする沙那。

「そのお礼に、今晚沙那のハートを奪っちゃおうかな？」
だんだん迫って近付いてくる右京。

「やーだ。右京さんって下品な人ね．．．。やっぱり離婚しようか
しら？ おやすみなさい」

慌てて自分の部屋に逃げ込んだ。

「ちえつ。逃げられたか．．．」

沙那の部屋の扉を見て、フツと笑う。

「当分、許してくれないか．．．。早く俺の部屋に引っ越してこいよ。待ってるからな」

その日の晩だった．．．。

『パタン!』と言う扉の音がして、就寝前、ベッドの上で読書をしていた右京がドアの方を見たら、ネグリジェ姿の沙那が立っていた。

「沙那．．．引っ越ししてきてくれたの?」

「ええ．．．今日からあなたの奥さんでしょ?」

「いいの?」

「ちょっと恐いけど．．．」

「おいで．．．」

ゆっくり近付いて、沙那がベッドにそうつと入って来た。

「可愛いな．．．。俺さ、鎌倉の家で沙那に接近出来なくて目を合わせられなかったのは、沙那に迫られたら自分が押さえられなくなりそうだったからなんだ．．．」

「凄く淋しかったし、あなたをどれだけ恨んだか．．．」

「本当にごめんな」

右京にふんわり抱きしめられて、とても安らかな心地良い気持ちに満たされる沙那。

本当はずっと ずっと こうなりたかったんだわと感じた。

* * * * *

それから暫くの後、右京と沙那の結婚式がとり行われた。

憧れのウエディングドレス．．．。

あの時結婚式を挙げなかったのは、特殊繊維が完成した時に、その布地で作ってあげたかったからだそうだ。

「玉城さん．．．今日はお祝いに駆けつけてださり、ありがとうございます
ございます」

美しいウエディングドレス姿の沙那に、可愛らしい素敵な花嫁さんだと嬉しそうに微笑む玉城。

「いやあ．．．離婚だなんて言われた時には心臓が止まりそうな気持ちでしたよ。これは誤解を解くのに一役買わなくてはともう、必死でしたよ．．．。本当に良かった．．．。」

「本当に、ご助言ありがとうございました。また工場にも遊びに行きますね」

「ええ．．．是非．．．。また良い布地が完成しそうなんですよ！
！社長がかわいい奥さんの洋服にも使いたいって言ってますよ」

「まあ．．．。」

「こらっ！玉城さんそれは秘密だって！！」
真っ赤に照れる右京．．．。

「あちゃ！これは失礼しました。秘密のプレゼントでしたか？」

「じらっ!」

「はいはい．．．邪魔者は消えますねー」

手をひらひらして、式場の参列者席の方に消えていった。

「全く!」

その漫才コンビのようなやりとりに、大笑いの沙那。

「おめでとうございます。いやあ沙那ちゃん、凄く素敵だよ」

ハウスクリーニングの元所長さん、今は工場で頑張ってくれている．．．。

「所長さん!! 今日はお祝いに来て下さって、ありがとうございます
ます」

「いやあ．．．もう所長じゃないから．．．」

「私の中では所長さんなんです」

「今日は変装してないけれど、なんだかいつもと違って見えるなあ．
．．．凄く綺麗だ!」

「ありがとうございます」

「あの時は橘社長から泣きつかれて、いやあ．．．私も大変だった
けど．．．無事丸く治まって良かった!」

「えっ? 所長さんもグルだったの?」

目が点の沙那．．．。

「江成さん！！それを言っちゃダメだって！！」
慌てふためく右京……。

「右京さん！！」
怒った目の沙那に、冷や汗ものの右京……。

――――沙那の父が残してくれた特殊繊維……。
一枚は光の加減で美しく虹色に変色する布地……。

この生地の名前は、IZUMI-ZENZOU布 和泉の父の名前だ。

もう一枚は 花嫁衣装やバレエなどのドレスなどに良く使われるオーガンジーに似た薄地の布地だが、僅かな光に反応して、まるでスワロフスキーやダイヤビーズを縫い込んだように……。夜空に瞬く星の様に……。光に反射する水面の様に……。キラキラと時折光る布地。

この布地の名前は IZUMI-SANNA布、沙那の名前が付いている。

沙那の父は、他にも色々な美しい特殊繊維を残してくれた。

一時父の莫大な負債を肩代わりして、右京の経営者としての資質を問われる程の声もあがり、右京自身窮地に追い込まれそうになったが、この布地の製品化で、想像を絶するほどの経常利益を生む事となった。

そして今日の結婚式の沙那の着ているウェディングドレスはもちろん、IZUMI-SANNA布で作られたものだ。
太陽の光に反応して、美しくキラキラと光っている。

これからの二人の未来のように・・・。

(・・・完・・・)

第12話 右京の正体（最終話）（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました。

余談ですが、所長さんの名前が最後に・・・そう・・・江成さんです。（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9107t/>

スティングー

2011年6月28日17時40分発行